

ヤン・ロワース&ニードカンパニー 『イザベラの部屋』



Jan Lauwers & Needcompany **LA CHAMBRE D'ISABELLA** ダンスや歌も交え綴られる作品で、新しいステージ体験を

彩の国さいたま芸術劇場に、2004年アヴィニョン・フェスティバルで話題をさらった『イザベラの部屋』が登場する。この作品が日本では初めての公演となるヤン・ロワース&ニードカンパニーは、実験演劇の騎手として、ヨーロッパ演劇界では旋風を巻き起こした集団だ。ダンスや歌を交え綴られる作品で新しいステージ体験をしたい。

文・佐藤友紀(ライター)

夥しい数の骨董品が観る者の想像力を掻き立てる

その部屋はまさに博覧強記を視覚化したようなものだった。アフリカの民族人形やお面や絵画があると思えば、古代エジプトの壺もあり、大小様々な岩や石もある。テーブルの上に無雑作に置かれたビデオカメラは、後に物語が起こっている室内を同時中継するし、どこかの部族の槍やら楽器などもごく自然にストーリー展開に参加して一演出家ヤン・ロワースの父親の遺品だという骨董品に囲まれた空間が、盲目の老女イザベラの住むパリの小さな部屋という設定にまず驚かされる『イザベラの部屋』。でもベルギーを代表する女優ヴィヴィアンヌ・ド・ミュインク扮するイザベラは、最初、幼い少女として登場する。灯台守のアルチュールとアンナ夫妻に育てられたイザベラの本名の父親は砂漠の王子で、「だから私は本当はプリンセスなの」と。ほぼ20世紀を生きたイザベラのライフ・ストーリーは、冒頭から観る者の想像力を激しくかき立てるのだ。

ダンスと歌で描かれる主人公たちの心象風景

“We just go on”という歌で始まり、デヴィッド・ボウイのヒット曲“ジギー・スターダスト”も使用される本作は、演劇とダンス、コミカルなスケッチが融合した非常にエキサイティングな表現形態。例えば、若くして亡くなったイザベラの養母アンナの葬儀は、男たちにリフトされたアンナが鳥のように空を切る美しいムーブメントで表されている。

もちろんこうしたダンスには、少女にも老女にも振れるイザベラ自身も参加。もっとも、より激しい動きを見せてくれるのは、イザベラの両面性を象徴している「快活な妹」と「意地悪な妹」の二人のダンサーで、彼女たちのアクロバティックなダンスは、90年という年月を生きたイザベラのエネルギーそのものとも言えるだろう。

フランス語、フラマン語を中心に、時おり英語、ドイツ語も入るテキストは、イザベラの人生だけでなく、20世紀そのものも語り尽くす。二つの世界大戦はもちろん、彼女の愛人のひとりが目撃したという広島原爆にも触れる。それらのすべてが展開されるイザベラの部屋は、時間も空間も超え、どんな次元にも変化していく。何しろ彼女の見聞は、アフリカから極東アジア、月への有人飛行まで及ぶのだから。

恋多きイザベラの人生はまるでマルグリット・デュラス

と同時に、イザベラの人生を味わい深いものにしてているのが、「74人いた」と彼女が豪語する恋人たちの存在。特に孫のような年格好の青年との恋は、作家マルグリット・デュラスや映画監督・写真家レニー・リーフェンシュタールなど20世紀の烈女を思わせ、爽快感すら覚えるほどだ。

膨大な数の骨董品で埋め尽くされた部屋の中、出演者全員が歌い、超絶技巧を披露する4人の中心ダンサーと共に踊り、ライブ演奏をし、イザベラの人生を語り合う。この圧倒的なパワーの前では、途中で明らかになるイザベラの出生の秘密も、もうどうでもよくなってしまふ。ヤン・ロワースと仲間たちが創り出す混沌を共有することこそ、新しいステージ体験と言えるだろう。

ベルギー出身の前衛的な舞台芸術家“ヤン”と言うと、日本ではまずヤン・ファールブルが想起されるだろう。本年、彩の国さいたま芸術劇場にて『わたしは血 JE SUIS SANG』公演(P.10~11参照)が予定されている奇才と、ヨーロッパでは並び称されているのはヤン・ロワースだ。アントワープに生まれたロワースは、ファールブルとは1歳違い。美術を背景に結成したカンパニーが、80年代初頭から実験的演劇集団として注目を集め始める。オリジナル作品のほか、シェイクスピアを翻案演出した作品も発表。暴力、愛、エロティシズム、そして死をテーマに、演劇とその意味を問い直す革新的な舞台表現で、国際的な評価を得た。ファールブルが人間の暗部を真正面から捉えて、陰だとすれば、ロワースは陽であり、絶望感の中にもどこかユーモラスでさえある。『イザベラの部屋』は、ロワースの父へのオマージュとも言われ、彼の私的な眼差しが描かれている作品。日本で初めてとなるこの公演で、彼の名は二人目の“ヤン”として、日本の舞台ファンの間にも記憶をとどめられることとなる。



Jan Lauwers ©Eveline Vanasche

ヤン・ロワース

1957年アントワープ生まれ。ゲント美術学校で学んだ後、79年にアート集団エビゴネンアンサンブルを結成。このアート集団は81年にエビゴネンシアターと改称した演劇集団となり、相次いで発表した演劇作品6作により演劇界に旋風を巻き起こした。85年にエビゴネン・シアターを解散し、翌年(86年)、ニードカンパニーを創立。2000年にはウィリアム・フォーサイスの依頼によりフランクフルト・バレエ団と共同制作した『DeaDDogsDon't Dance/DJamesDjoyceDeaD』を上演。『イザベラの部屋』は、2004年のアヴィニョン・フェスティバルでの初演以来、ヨーロッパ、アメリカ、カナダ、オーストラリアの各都市で130回以上の上演を重ねている。映画やビデオ作品も多数制作しているほか、2007年には美術作品を集めた初めての大規模な個展がブリュッセルで開催される予定。

ヤン・ロワース&ニードカンパニー
『イザベラの部屋』(日本語字幕) **NEW**

古代エジプトやアフリカの発掘品、骨董品にあふれた部屋に暮らす盲目の老女イザベラ。彼女は20世紀のほとんどを生きてきた。第一次世界大戦、第二次世界大戦、ヒロシマ、植民地主義、ジョイスやピカソらのモダン・アート、月への有人飛行、デヴィッド・ボウイの「ジギー・スターダスト」……。9人の俳優、ダンサー、ミュージシャンが、イザベラの部屋の秘密を解き明かし、彼女の生涯をたどる。ダンス、演劇、音楽が混交した革新的な舞台表現によって語られる、生への情熱。

【日時】4月6日(金) 開演 19:00 / 7日(土) 開演 15:00 / 8日(日) 開演 15:00
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
【演目】『イザベラの部屋』(2004年初演) 【構成・演出・舞台美術】ヤン・ロワース
【テキスト】ヤン・ロワース、アネーケ・ボネマ「嘘つきのモノローグ」
【音楽】ハンス・ベター・ダール、マルティン・セガース 【歌詞】ヤン・ロワース、アネーケ・ボネマ
【出演】俳優、ダンサー、ミュージシャン 10名
【チケット(税込)】一般S席6,000円 A席4,000円 学生A席2,000円
メンバーズS席5,400円 A席3,600円
【発売日】メンバーズ1月20日(土) 一般1月27日(土)

「コンドルズ埼玉スペシャル公演2007」決定!
チケット販売も間もなく開始。 **NEW**

昨年5月に上演された『勝利への脱出 SHUFFLE』が絶賛を博した「コンドルズ」が、1年ぶりに彩の国さいたま芸術劇場に登場。今年はどうなる舞台を見せてくれるのか、乞うご期待。

【日時】5月12日(土) 開演 17:00
13日(日) 開演 13:00 / 開演 18:00
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール
【演目】2007年新作(タイトル未定)
【構成・映像・振付】近藤良平 【出演】コンドルズ
【チケット(税込)】
一般 前売4,000円 当日4,500円 学生2,000円
メンバーズ 前売3,600円 当日4,050円
【発売日】メンバーズ2月3日(土) 一般2月17日(土)